

---

**だぶる！**

masa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だぶる！

### 【Nコード】

N6102N

### 【作者名】

masa

### 【あらすじ】

人気バンド、放課後ティータイムが風都でライブ！盛り上がる鳴海探偵事務所一同（亜樹子を除く）だが……！？ 放課後ティータイムを襲う罠に2人で1人の探偵が立ち向かう！

\*このsssはarcadiaにも投稿されています。

## プロローグ【Wのライブ／探偵と音楽】

『探偵事務所には音楽というものも欠かせない　というより流れる音楽こそがその事務所の空気というものを決定付けている。』

当然この鳴海探偵事務所にも音楽は欠かしたことはない。俺はコーヒーのカップを置くと、年季の入ったラジオに近づきスイッチを付ける。

ラジオから流れ出すのは天使の如き歌声。俺は再び椅子に体を埋めると、相棒と共にその歌声に耳を傾けた』

「……………2人とも何やってんの？」

「馬鹿！放課後ティータイムの歌声を邪魔すんな！」

怒鳴る翔太郎だが、亜樹子が訝しげな顔で尋ねるのは寧ろ当然だろう。男2人がラジオの前にかじりつき、亜樹子でさえ赤面するような小っ恥ずかしくなるような歌詞の歌を大声でデュエットしているのだ。きつい……と、言うよりは痛い。

「放課後ティータイムう？」

どうやら2人の聞いている歌を歌っているユニットの名前なのだろう。とはいえ亜樹子は何処かで名前を聞いたかな、位の認識だが。しかしそんな亜樹子のリアクションにフィリップが黙っていなかった。

「アキちゃん、何を言ってるんだ！放課後ティータイムといえば、今最も熱いガールズバンドじゃないか！」

「ちょ、フィリップくん落ち着いて」

「初CD『ふわふわ時間』はオリコンの集計では、発売前日の2009年7月21日付デイリーチャートで1位にランクインした後、同年7月25日付デイリーチャートまで5日連続1位を記録。さらに同年8月3日付週間チャートでは初登場1位を獲得。そしてつい最近では武道館でのライブまで成功させた。ビジュアルだけでなく確かな演奏技術に裏打ちされたハイレベルな音楽は玄人さえも唸らせ「フィリップ！……！？」

「真に彼女達を愛するのなら、今やるべきは語る事じゃない」

「……そうだね、翔太郎。どうやら僕は一番大事なことを忘れてい

たよつだ  
」

「いいさ、行くぜ相棒！」

「「ふわふわ時間！ ふわふわ時間！」

「……だめだ、こりゃ」

「「けいおん大好き〜〜！！！」」

『え〜、ここで放課後ティータイムの大事なお知らせを発表します』

歌も終わり、何故かやり遂げたような表情の2人の耳に、パーソナリティである『園崎若菜』、通称『若菜姫』の声が聞こえてくる。その彼女の『大事なお知らせ』、の一点に彼は異常に素早い反応を見せた。

『この度！放課後ティータイムの次のライブが決定しました！場所は風都！みんなぜひ見に来てくださいね！』

「放課後ティータイムのライブが……風都で？」

一瞬呆けたように黙り込む翔太郎。しかし次の瞬間古い事務所が壊れそうになるくらいの絶叫を放った。

勿論、叫んでいないだけでフィリップも興奮を隠し切れていない。と、というか隠そうともしていない。

そしてそんな2人についていけない亜樹子。

この事務所では珍しい光景。

しかし、後にこのライブが大事件に発展するなど、無論、今の彼らには彼らは知る由もない。

『そう。俺は忘れていた。探偵事務所には、音楽以上に難事件が良く似合うという事を』

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E

## Wのライブ／探偵と音楽 依頼編

「いいか、お前等！これは俺達の放課後ティータイムへの愛が試される、謂わば、試金石だ……俺達、風都のH T Tファンが応援で負けるわけにはいかねえ」

現在、鳴海探偵事務所の人口密度は限界ギリギリを迎えていた。正直暑苦しいが、その場に集っている兵達はその熱気さえも心地良いとばかりに、その情熱を滾らせている。

その熱気を受けてか、翔太郎の演説は益々ヒートアップ。今ならメモリに頼らずともアイスエイジのメモリをブレイク出来るのでは？というところまでの昂りを見せている。

「だが！俺達の相手はあの放課後ティータイムを追いかけ続けた海千山千のファン！はつきりいつてこのホームグラウンドでも厳しい戦いとなる筈だ！」

翔太郎の、普段から顰められた眉間の皺が更に深くなる。

彼は、本気だ……！！

観衆達に緊張が走る。

「その点に抜かりはない。放課後ティータイムの情報に関してはすでに検索を終えている」



不敵に笑うフィリップ。その笑みには自身の『検索』に対する絶对的な自負が窺えた。

「甘いな、フィリップ……真のファンに必要なものは検索で集めた情報なんかじゃねえ」

しかし翔太郎はそんなフィリップを寧ろ憐れんだように見つめている。そして徐に來ているシャツのボタンに指をかけ、一気に胸をはだける。

はねむゝん

燦然と輝くその一文が翔太郎の胸に露わになったことで、周囲が俄かにざわつきを見せ始めた。

「し、翔太郎！そのTシャツをどこで……！？」

そんな喧騒など耳に入らないかのように、翔太郎は熱く、ただひたすらに熱く語り続ける。

「そんなことはどうでもいい。いいか？真のファン足り得る為に必要なもの。それは」

「魂だ」

おおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！！！

その瞬間、空気が爆発した。

中には彼の演説に感極まったのか滂沱の涙を流している者さえいる。

「駄目だ、こいつら」

そんな狂騒と熱狂を前にして、ぽつりとこぼれた亜樹子の眩き

無論それらに紛れ、彼らの耳に届くことはなかった。

そんな馬鹿騒ぎを繰り広げていた鳴海探偵事務所メンバー　とい  
うか探偵2人　の元に、一件の依頼が届いてきたのはそれから一  
月後の事である。

『Wのライブ／探偵と音楽』

それは放課後ティータイムのライブが2日前までに迫った日のこと  
である。

平素、鳴海探偵事務所に依頼が来ること自体は珍しくもない。

多少ええ格好しいなところはあれども、この風都に翔太郎の優秀さ  
を疑う者は殆どいない。

ただこの日の依頼に限り。姿を現した依頼人は翔太郎にとっては十分に非日常と言えた。

なぜならその顔は

「まさか、あ、あんた……放課後ティータイムの平沢唯!？」

あまりに予想外の人物に、翔太郎は常日頃保っている（翔太郎主観）ハードボイルド（やはり正太郎主観）を保つ余裕さえも吹き飛ばされてしまう。

「ち、違います！私は平沢憂!」

「平沢唯の妹です!」

「……へ?」

そんな翔太郎の狼狽ぶりを目の当たりにして、平沢『憂』は慌てて彼の勘違いを訂正する。

そんな彼女のオーバリアクション気味な反応に冷静さを取り戻した翔太郎は、失礼かとも思いつつも彼女をまじまじと観察してみる。

成程、確かに顔の造形こそ非常に似通っているが、しっかりと見れば別人だ。

「妹さんだったのか……それにしても似てるな」

翔太郎は心から呟いた。

「ふふ……よく言われます。それより、依頼の話に移らせてもらっていいですか？」

憂は翔太郎の勘違いにも、怒り一つ見せない。ただ、僅かながらの苦笑は浮かべているが。

「ああ、構わないぜ」

おそらくはまだ学生であろう憂の、歳不相応な対応の練れ方に感心しつつ翔太郎はソファを進める。それに軽く頭を下げ応じる憂。

（確実に亜樹子よりもしつかりしてんな、この娘）

その姿を見て、そんな失敬な事を頭の中に浮かべつつ、自身もその対面に座り話を聞き始めた。

依頼書

依頼者：平沢憂

依頼内容：放課後ティータイムの護衛

備考：ボーカルの1人、秋山澪が数日前から奇妙な怪人を目撃している、との事。

見間違えかもしれないが、ストーカーの可能性も捨てきれないので護衛を頼みたい。」

「秋山澪さんがストーカーに遭っている？」

翔太郎から伝えられた依頼内容にフィリップが顔を顰める。憂の依頼とは、放課後ティータイムのメインボーカル、秋山澪に関する件だった。

「それでどう思う、フィリップ？」

どことなく煮え切らない翔太郎の表情に、フィリップは「ふむ」と意味ありげに笑みを浮かべる。

「大方、君が不安を感じているのは、彼女の依頼に含まれている『怪人』というフレーズ、かな？」

「怪人……か」

フィリップの言うとおりである。彼女のその一言が、翔太郎に妙な胸騒ぎを残している。

『怪人』

少なくともこの風都で、そのフレーズを笑い飛ばせるものはいないだろう。

何故ならそれは都市伝説などではなく、現実にこの街を蝕んでいるのだから。

そんな彼の懸念を振り払うようにフィリップは続ける。

「秋山澪がストーカーに遭っているのは風都の外での出来事。君の考えすぎだろう」

「だと、いいんだけどな」

「ところで翔太郎くん？なんで所長を通さずに君が依頼を受けちゃってるのかな？」

いつもの3割くらい眉間の皺を深め思索に入る翔太郎の頭に、亜樹子の伝家の宝刀スリッパが炸裂した。

『さて、実のところ俺が受けた依頼には少しばかり続きがある』

「それじゃあ、安心しな。俺達が依頼を受けたからには、どんな相

手だろうと絶対にお姉さん達を護り切る」

護衛対象が放課後ティータイムであることも手伝ってか、いつもの3割増しほどに格好つける翔太郎。しかし

「あのっ！実は左さんにもう一つお頼みしたいことがあるんです！」

「ふっ　なんでもいってみな」

調子に乗って安請け合いでする翔太郎。いつもそれで面倒な事件に巻き込まれるのだが、幸いというべきか、今回に関してはそんなことはなかった。

「それじゃあ　お姉ちゃん達にこの町を案内してもらえませんか？」

「案内？」

「はい。お姉ちゃん達はデビューしてからすごく有名になりました。それでいろんな所を廻ってます。だけど　」

言葉を切る憂だったが、彼女の浮かべる表情が、翔太郎におぼろげながらも事情を伝えてくる。成程、未だ学生の身でありながらの成功がもたらしたのはいいことばかりではないということか。

「だから一度でいいから昔みたいに皆でゆっくりと遊んで欲しいんです」

「売れっ子ってえのも善し悪しってわけか。だけど、なんで俺なんだ？」

無論、依頼を受けるのはやぶさかではない、というか誰が何と言おうが受ける。しかし風都以外では別段に有名というわけでもない彼に何故依頼をしてきたのか、という疑問があった。

「警察には怪人を見たなんていつても聞いてもらえないんです。それでこの街には警察も受け入れない事件を受けてくれる探偵さんがいるって聞いて それにここにくるまで左さんの事を何人かに聞いてきたんですけど、そしたら皆が左さんはこの街に誰よりも詳しくって」

「成程ね」

彼女の表情を見れば、彼女が如何に姉とその友人たちを愛しているか、というのが一目でわかる。それこそ翔太郎がこの街を愛する事にも引けを取らぬほどに。

そして何より 眼前の少女は、左翔太郎がこの街に誰よりも詳しくと聞いてきたと言う。ならば答えなど決まっている。

「この風都は俺の庭……その依頼、確かに聞いたぜ」

『こうして俺は1つの大きな依頼と1つの小さな願いを受けることとなった。』



さて放課後ティータイムとの顔合わせにストーカーの犯人捜し。やることは色々あるが、最初にやることは

『

「風都ツアーの内容でも考えるか」

ガイドブック片手に放った翔太郎の言葉に、フィリップと亜樹子は頭に疑問符を浮かべるのだった。

T o B e C o n t i n u e

## 第1話 【Kは求める／芸術の名は殺人】

「実は、これから行く風都って街は、色々と《噂》の絶えない街でね」

律がその話題を出したのは本当に些細な動機だった。

「う、噂？」

今度のライブで訪れることになった風都。聞き覚えの無い名前に、面白そうな何かが見つからないものかと、柄にもなく下調べしてみたのだ。

果たして、その成果はあった、と律は実に満足している。

じつくりと思わせぶりにためを作るその様は、実はこちらの方が本職では？と周囲にと思わせるほどに堂に入っていた。

「ああ。《怪人》が人を襲い、そして人を殺す」

「……………っ!？」

ただ、一つばかりの誤算。

殺す。その一言は繊細、というか臆病すぎる凄に過剰過ぎる程の反応を取らせたのだ。

「き、聞こえない、聞こえない」

ふるふると小動物の様に、部屋の隅で震える漣。いつものことと言  
つてしまえばそれまでだが、今回は少々過剰に過ぎる。

「りっちゃん、怖がらせすぎだよ」

いつもだったら乗っかってきそうな唯も今回はかりは、少しばかり  
窘める様な声色。流石に律も少しばかり調子に乗りすぎたことに気  
がつき、慌ててフォローを入れる。幸いと言つべきか、風都と言つ  
街には、ピッタリの噂もまた同時に存在する。

「あゝ……まあ、なんだ？大丈夫だろ、どうやら噂ではそいつらを  
倒す《超人》もいるみたいだしね」

「まあ、いざとなったら守ってもらえばいいさ」

「噂の《ヒーロー》に」

しかしこの時、律は予想もしていなかった。

否、誰が予想出来るというのだろうか。

漣の感じた恐怖が現実となるなどと。

『Kは求める／芸術の名は殺人』

「あつ！ねえ、皆」

唯が待ち合わせ場所に佇んでいる一人の青年を指さす。その瞬間、全員が納得した。

澁のボディガードとして探偵を雇った、と聞いて皆、どんな人物かを色々と想像していたのだが……

「探偵さんってあの人じゃないかな？」

唯に指摘されるまでもない。皆一目で彼が探偵だと認識した。寧ろ、それ以外で認識できない。

一昔、どこるか二昔は前　そう、言ってみれば古き良き探偵小説からでも切り取ってきたような服装の青年。

「あー……いや、まあ、私もそうだとは思っけど」

「ある意味、予想の斜め上で来ましたね」

と、いうよりあの恰好でメイキャツパーでした、といわれたら逆に釈然としない。

それほどまでに、彼《左翔太郎》の姿は、嘘臭ささえも感じさせるほどの探偵であった。

「あ、でもそれはそれで面白いかも。あの恰好で実は教師、とか」

「これが本当の探偵学園！ってやつだね」

「何を言ってるんですか……」

律と唯の無駄にコンビネーション抜群な掛け合いを尻目に、梓は少しばかり、いや多大に不安になる。

「そりゃあ、形から入る、っていう言葉はあるにはありますけど、あれはそういうレベルで済ませていいんでしょうか？」

仮にも漣を守る、という目的で雇った人間である。そりゃあ憂が探してきた人間だから、信用できる人間ではあるうが、それが信頼文字通りの信じ頼ることのできる人間で あるかは別の話だ。

「放課後ティータイムの皆さんですね」

そうこうと躊躇っているうちに、翔太郎の方から話しかけてきた。翔太郎はやけに気障ったらしい仕草で名刺を取り出す。

あらゆる事件をハードボイルドに解決

探偵 左翔太郎

( (胡散臭っ!?) )

特にハードボイルドを己で語っているあたり、本当にこの男はハードボイルドの意味を 理解しているのだろうか？ 漣と梓の胸裏にドンドンと不信感が蓄積されていく。

「すっげー！本物の探偵なんて初めて見た！」

「私も。どきどきするわぁ」

「おお〜！探偵というと、怪盗とか捕まえたり!？」

「甘いな、唯隊員。それどころかきつと埋蔵金とかも見つけるぞ！」

ただ、それを気にしないものもいた、というよりこの放課後ティータイムの面々に限って言えば、比率的に漣や梓のような反応の方がマイノリティだったようだ。

「ちょっと、待て！そして律は何か、というか明らかにおかしいでしょー！」

「そうですね！大体、探偵なんて依頼の殆どは精々ペット探しなんですよー！」

漣と梓の2トップによる突っ込みを受けた唯は、しかしどこ吹く風である。

「そんなことないよ！きつと行く先々で殺人事件に見舞われたりするんだよ！だって探偵だよ!？」

「俺は何処の眠りの小 郎だ！」

「いやですよ、そんな血塗られた探偵!!！」

今度は翔太郎と梓の突っ込みが同時に炸裂する。しかし、翔太郎はハタと動きを止める。そして今度は、すかさず梓へとその矛先を変える。

「 って失礼だな、オイ！ちゃんとした依頼くらいあるに決まってるだろ！」

「じゃあ一番最近の依頼は？」

「……そ、そりゃあ、お前、あれだ……」

梓のズバリ過ぎる直球に、翔太郎は盛大に視線をそらすと、やや以てどもり

「ペット探しだって大事な依頼だろうが！」

……ペット探しであった。

切れ味の良い梓の毒舌の前に旗色が悪くなってきた翔太郎だが、そこに救いのコールがかかった。翔太郎はここぞとばかりに慌ててスタッグフォンを取る。

『やあ、翔太郎。もう放課後ティータイムとの顔合わせは済んだのかな？だとしたら僕の方、サインを貰ってきてくれ』

第一声がこれである。

翔太郎は疲れた様に溜息を吐く。実はなかなか有り難いタイミングだったのは黙っておいたが。

「……まさか、そんな理由で電話してきたんじゃないだろうな？」

『まさか。実は今、刃野刑事から興味深い写真が送られてきた。今、メールで送ろう』

写真を見た翔太郎は言葉を失くす。

当然だろう。写真の中では、まるで死者の塔とでも言うべきか、死体の山が築きあげられていたのだから。

「……何だ、こりゃ」

その写真に写っていたものは一瞬、出来の良い蠟人形を思わせた。

だが、すぐさま本能がそれを誤りと判断する。

作り物が、人の手がこんな生々しい死相を、死の匂いを再現出来る筈が無い。

写真に写っているのは、艶のある光沢に包まれた死体。

それらは年齢、性別共にバラバラだが共通点が一つだけある。それは、死体全ての容姿があまりにも、美しい。



それがこの猟奇的な死体達に、狂的な美術性を纏わせる。

否、或いは、犯人にとってこれは真実、芸術なのかもしれない。

その倒錯した官能に引き込まれるような気がして、翔太郎は写真から目を逸らす。

『数日前の死体らしいが……この光沢……それに保水性からして蠟の類かな？』

スタッグフォンから聞こえるフィリップの声は、写真の発する猟奇的な美、倒錯した魅惑、それらに対しての興味を一切匂わせない。いつも通りの相棒の声は、翔太郎に奇妙な安心感をもたらした。

『恐らく、メモリの正体は《CANDLE》。実に解りやすいが、それ以上に興味深いのは犯人の思考と嗜好だ』

寧ろフィリップにとって興味の対象は唯の一点、犯人そのものという事なのだろうか。

『ただ放課後ティータイムのライブを邪魔する様な真似をされると非常に困るな』

「お前、色々凄いや、やっぱ……」

訂正。もう一点あったようだ。

『とはいえ……これは蠟人形にでも見立てているつもりかな？ 実に興味深い』

実に不謹慎な言葉である。しかし当のフィリップはそんなこと気にも留めずに話を続ける。

『どうやら犯人はジャロッド教授でも気取っているようだ』

「だったらそのうち蠟人形の館でも作るんだろうぜ、フィリップ」  
「マーロウ」

『翔太郎……間違っても放課後ティータイムのメンバーに危害が及ぶことのないように』

「……って、それが言いたかっただけかよ……」

返事は返ってこない。なにせとつくに切られている。

ぼやく翔太郎を無視して、フィリップはさっさと電話を切ってしまった様だ。相変わらずの相棒の自由さ加減に、翔太郎は本日幾度目かもわからない溜息をついた。

「やれやれ、また調べることが……あ？」

疲れたように頭を振る翔太郎の眼前には、何時の間にか一人の男が立っていた。その男の異様な様子は、厭が応でも翔太郎の悪い予感を掻き立てる。

そして、その予感は放たれた次の一言で決定的となった。

「お、お、お前、彼女達と、ど、どんな関係だ？」

男の眼の放つ輝きは尋常な物ではない。その眼に、声に宿っている狂気に、唯達は僅かに怯えを見せた。翔太郎はそんな男の視線を遮るように、彼女たちの前に出る。

「俺はこの街の探偵、左翔太郎。彼女達のボディガードさ」

尤も、そんなときでさえも気取った仕草を忘れないのが、左翔太郎という男なのだが。

クール、と本人は信じている笑みを浮かべる彼が少々お気に召さなかったのだろうか。  
どこか苛立ったかのように男は答える。

「ぼ、ぼくは芸術家さ。そ、そざい、をしつかりと間近で見えておこうと思つて」

「そ、そざい？」

素材。そしてさっきの写真。蠟人形。

これらの単語が結びつき、翔太郎の中の嫌な予感がはっきりと形を作った。

(こいつ、まさか……!?)

そしてその嫌な予感を証明するかのように、男の手の中で彫刻刀の刃が鈍い輝きを見せた。

「ウソだろ!？」

「退つてろ！」

だが、この手の輩にある程度慣れている翔太郎にしてみれば、そのくらいの行動は予想範囲。

即座に迎撃に出る。その姿には刃物に対する怯えはなく、且つ油断もない自然体。

しかし男にはそれを見取る力量など、無い。ただ、素人丸出しで彫刻刀を縦に横にと振り回す。

しかし当然ながら彫刻刀の刃先は、翔太郎には掠めもしない。

「おらあー！」

それどころか気合一閃、翔太郎の上段蹴りが男の側頭部に突き刺さる。男の身体が、軽々と吹き飛んだ。

「強え〜」

今一頼りになるのか疑問だった翔太郎の、素人目にも場馴れした強さに、一同は声も出せない。辛うじて零れた律の一言が一同の心境全てを表わしていた。

「くそつ！くそつ！邪魔しやがって！馬鹿にしやがって！」

しかし男は頑丈であった。否、あまりの怒りと狂気に、痛みがマヒしているのかもしれない。2mは弾き飛ばされるほどの一撃を、頭部に叩き込まれたというのに、すぐさま立ち上がると、懐から何かを取り出す。その正体は

「な、何だあ？」

「USB？」

その正体は少しばかり派手な装飾をされたUSBだった。だが何故それをこの状況で取り出すのか。律達は首を傾げる。その本性を知る翔太郎以外は。

《C A N D O L E ! 》

「ガイアメモリ！！」

そう。この街を蝕む悪魔のアイテム。超人的な力と引き換えに身体と精神。そして命さえをも侵食していくおぞましき契約。男はシヤツを捲りあげると、鳩尾のコネクタにキャンドルメモリを突き刺した。

《C A N D O L E ! 》

そして内包する《蠟の記憶》が男をキャンドルドーパントへと変貌させる。その姿からは、もはや人を感じさせる部位など殆ど残ってはいない。

「お返しだぜえ！！」

キャンドルドーパントは、小手調べとばかりに、まるで邪魔な小虫を払いのけるかのように、無造作のその異形と化した巨腕を振るつ。

「しまっ！？ぐあああ！……！！」

翔太郎の反応は決して遅れたわけではない。しかし軽く掠めただけに見えた一撃は、それでも人間一人を吹き飛ばすには十分足るものだったのだ。

自動車にでも跳ね飛ばされたかのように道路に叩き付けられた翔太郎を見やっつて、キャンドルドーパントの声が愉悦に濁る。

「いいなあ……この姿になれば俺は何でも出来る」

ドーパントは自身の得た力が齎す全能感に陶醉している様だった。

「あんな風に惨めにどもる事もない」

「俺の芸術を理解しない奴等を消すことも……何より今まで以上に素晴らしい作品を作れるう！」

だが、嬉々として語る彼の姿は最早人のそれを留めていなかった。燭台と人間のシルエットを無理矢理にパッチワークで継ぎ合わせたかのような酷く歪な、そしてちぐはぐな異形。

醜悪なその姿、しかし唯達が恐怖を感じているのはそんなところではない。

「ああ、本当にいい。皆、綺麗な顔だあ。君達は皆、最高の素材になっってくれそうだよあ。特に澪ちゃんはねえ」

その姿以上に、歪でおぞましい狂気。変身する前は辛うじて内に籠っていたそれが、今や隠すことなく澪にぶつけられている。

「あの探偵もそこそこに見た目は良かったから、惜しいことをしたけどなあ」

その腕からどろりとした蠟が垂れた。

「でも、今は君からだねえ！！！！！」

「漣！逃げろ！」

律の叫びも、完全に怯えきった今の漣には届かない。

律が、唯が、紬が、梓が、せめて自分の身体を盾にしようと駆け出す。

その瞬間

《 C Y C L O N E ! 》 《 J O K E R  
! 》

風が起こった。

ドーパントの悪意を苛烈に吹き飛ばすように。

漣の涙を優しく拭うかのように。

風に攫われ礫塵が吹き散らされる。風を受けカラカラと風車が廻る。  
風都が風に包まれる。

そしてその風の中には 人影が佇んでいた。

赤く輝く瞳。風と共に靡くマフラー。

何故かは解らない。しかしその影は不思議と澁に安堵を齎す。

（ああ、私、助かったんだな）

根拠など無い。しかしその思考を最後に、澁の意識は静かに闇へと落ちていった。

「仮面……ライダー？」

T o B e C o n t i n u e



第2話『Kは求める／そのアートは救えない』(前書き)

第2話 『Kは求める／そのアートは赦さない』

その左半身は黒だった。夜に紛れ悲劇を終わらせる《JOKER》

その右半身は緑だった。吹き荒び涙を吹き散らす《CYCLONE》

《彼等》の名は <sup>ダブル</sup>W

『さあ 『お前の罪を 『 『数えろ！！』』』

その光景を見たのは完全に偶然だった。

深紅のベルト《ダブルドライバ》に緑色のメモリが現れる。それと同時に翔太郎は黒いメモリを取りだし、同じように差し込んだ。そしてドライバをダブルの形に開く。

「変身！」

《C Y C L O N E ! 》 《J O K E R  
! 》

翔太郎の身体が巻き起こる風と共に、人外へと変容していく。

黒と翠が映える美しい左右対称。  
それを見た時、彼女は思わず呟いていた。

「仮面……ライダー？」

（どうしよう……あの人がそうなんだ……）

彼女は無意識にそっと服のポケットに手を入れる。

その指先に一本のメモリが触れる。彼女はそれを強く、強く握りしめた。

『Kは求める／そのアートは赦さない』

「へえ？その緑と黒……綺麗だねえ。素材にちょうど良さそうだよ  
お？」

『ハン？やってみるよ』

ダブルの姿を見ても動じずに狂気を見せつけるキャンドルドーパント。しかしダブルもまた、その狂気を目の当たりにしても、軽く鼻で笑い飛ばした。

「その前に黙らせるう……！」

ダブル 翔太郎の嘲笑を皮切りにキャンドルドーパントが、蠟を

精製しダブルに放つ。

『おっとー!』

ダブルはそれをあつさりと避ける。そこに殺到する蠟の弾丸。しかしそれをもダブルは悠々と掻い潜り、キャンドルドーパントの懐へと入りこむ。

『おらあ!』

飛び込む勢いのままに放たれる後ろ回し蹴り。鈍器で岩を砕いたかのような音が響く。突き刺さる強烈な一撃に、キャンドルドーパントの胸がくの字に折れた。しかしダブルの動きは止まらない。それどころか更に加速する。

疾風の如く鋭く、そして軽やかに。

蹴りが、拳が、蹴撃、拳打の嵐となってキャンドルドーパントを呑み込んでいく。

奔放且つ縦横無尽。

正しく CYCLONE 《旋風》を冠すに相応しく

荒々しく、颯爽と

アクロバティックにしてダイナミックに

それでいて洗練された 技が疾る。

そして止めとばかりに、空を突き刺す様な槍の如き蹴り。100キロは優に超えているドーパントの身体が、一瞬宙に浮く。

ダウンしたドーパントを尻目に、フィリップが語りかけてくる。

『翔太郎、相手が蠟なら……僕の側のメモリ、変えよう』

「え？お、おい!？」

翔太郎の意思に反して、その右腕が勝手にソウルメモリを入れ替える。

《 H E A T ! 》

メモリの色は《 H 》の刻印が刻まれた 炎の様な赤。

《 H E A T ! 》 《 J O K E R ! 》

黒と赤のW。ヒートジョーカー風を思わせた右半身の色が、鮮烈な赤色へと変貌。そしてWの半身をそれさえ霞むほどの紅蓮の炎が包み込む。

そう。《 H E A T 》のメモリが与えるのは文字通り《 熱 》。今やWの体術には全て鋼鉄さえも焼き払う超高熱が宿っている。

『 ハッ！まあいいか…… キャンドルサービスだ…… ド派手にいくぜー！！』

アップパーボルテージマターと呼ばれる興奮物質が、エンドルフィン遙かに超えて翔太郎の闘争本能を刺激して、翔太郎の意識は燃え盛るかの如く高揚していく。

ダブルの右拳がメキリと音を立てた。

それに呼応するかのように、ヒートサイドから一気に焰が噴き出す。陽炎が立ち込め景色がゆらゆらと揺れた。

ダブルは湧きあがる凶暴な衝動に身を任せるままに、キャンドルドーパントへと駆け出す。

『 つらあ！！……！！』

空気を揺らめかせ、蒸気を引きながら、焰を纏い、紅の拳がドーパントの顔面に突き刺さった。

刹那、轟音と共にドーパントの顔面が、文字どおりの意味で『爆発した』。

一瞬、意識が立たれるような凄絶な威力を込めた一撃。しかしダブルは容赦無く追撃を仕掛ける。

爆発。爆発。爆発。

そして極端に振り被ったの、豪快無比なテレフォンパンチ。

それまでとは比較にならないほどの爆発と衝撃が、キャンドルドーパントを派手に吹き飛ばした。

しかし

「あん？」

「あははははは！！そうだあ！早く素材に成れええええええ！！！！」

吹き飛ぶ瞬間に放たれた一発を避けきれなかった。付着した蟻は自然界では在り得ないほどの強度と早さで硬直していく。

しかし翔太郎達は一瞬で固まっていく自分の右腕を見ても慌てる素振り一つ見せない。

「ハッ！そいつはどうかかな？」

翔太郎は新たなメモリを取り出す。冷たい鉄の色をしたメモリを。

《 M E T A L 》

メタルメモリと呼ばれるソレをジョーカーメモリと入れ替えるように差し込む。

《 H E A T ! 》 《 M E T A L ! 》

ダブルの黒い左半身が文字通り鋼鉄《METAL》を連想させるような鈍色に輝きを変じた。

それと同時に、焔の勢いが増し、蠟が溶ける。否、蒸発した。理論上、核攻撃をも耐えきる肉体を与える闘士の左半身。

3,000 にも及ぶ熱量を自在に操る力を与える熱き右半身。

《METAL》と《HEAT》が最高のシナジーで重なり合った姿。ダブルの基本形態、《熱き闘士・ヒートメタル》である。

ヒートの力を限界まで引き出した今のダブルに、たかが少しばかり溶けづらいただけの蠟など、何の拘束にもならない。

「く、くそっ!」

唸り上げるメタルシャフトが、赤い螺旋を描き、撃ち出された蠟を全て叩き落とす。更に炎の竜巻が、焼き尽くしその全てを気化させる。

『翔太郎、メモリブレイクだ!』

『ああ!』

メタルシャフトにメタルメモリが差し込まれる。

《METAL!》《MAXIMUM  
DRIVE!》



メタルメモリから引き出されるエネルギーが一気に限界値の領域まで跳ね上がった。

同時にヒートメモリもそれに呼応するかのようになり、メタルシャフトに籠る熱量を暴走寸前まで引き上げる。

ダブルが直に来る反動に備え、足を踏みしめる。

そして　　ダブルは鋼鉄の弾丸となった。

地面が爆発する。視界の全てが線と化する。

『『これで決まりだ　　』』

苦し紛れに放たれた蠟の弾丸は、しかし今や3、000　　を超えるダブルの身体には届かない。

ダブルは両の腕に渾身の力を込め、思い切りメタルシャフトを振りかぶった。

『『メタルブランディング!!!』』

破壊力、30tにも及ぶ裁きの一撃が唸りを上げキャンドルドーパントに叩きつけられる。

キャンドルドーパントは力尽きた様に崩れ落ち、そのまま爆発した。

爆発が収まると、そこには先ほどの男が横たわっている。その傍らにはキャンドルメモリが落ちている。しかしそれも程無くして砕け散った。

『……最後は自分がキャンドルアートだ。満足だろ?』

律達はその光景を呆然と見ていた。

唯の都市伝説と思っていた『怪人』と『仮面ライダー』。

それが現実として目の前で戦っているのだ。

そして程無くして戦いは終結する。仮面ライダーの圧勝という形で。その強さは凄まじいものだった。

「ほ、本当にいたんだ……仮面ライダー」

律はまるで夢でも見ていたかのように呟く。

だが呆然としつつも、皆心の中では同じことを考えていた。

トンデモナイ街に来てしまったのかもしれない、と。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6102n/>

---

だぶる！

2010年10月8日11時28分発行